
廃墟に君は残る

凧沚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

廃墟に君は残る

【Nコード】

N5721C

【作者名】

風止

【あらすじ】

クリスマスプレゼントを買いに僕等はデパートにやって来た。そこで僕等は…。

第1話：彼女は死んだ

割れたガラスの破片を僕の靴裏がパキパキと複雑に鳴らした。

廃墟と化したこの場所に再び足を踏み入れることを許してほしい。高校生のときに足を踏み入れて以来、僕はこの中に訪れたことはなかった。

けれど今、クリスマスのこの日にここを訪れたのには訳がある。クリスマスのあの日、高校生の僕は彼女の穂香ほのかと共にここを訪れていた。

その頃はまだ廃墟になっておらず、大きなデパートのようなところだった。地下があり、上は三階、下は地下一階と僕の住む地方ではなかなかの大きさの建物だった。

僕らは二階にある雑貨屋に向かい、二人でお揃いの携帯ストラップを買いに行こうとしていた。

「かわいいのあるかな？」

「気に入るのあるといいけどなあ」

エスカレーターを上がり店の奥へと進む、端にあるエスカレーターから端にある雑貨屋に移動するには結構な距離を歩かなければならない。

歩いている途中、目に入った非常口と書かれた緑の光に違和感と不思議な気持ちを感じた。

それでも僕は他愛もない話に花を咲かせ、一步一步足を進めて行った。

程なくして辿り着いた店には、髑髏の人形が出迎える悪趣味な店だった。

しかし中は意外にシンプルでテナントとしては小綺麗に纏まっていた。その中、レジ前にあるストラップコーナーに僕は足を向けた。

「これ良くない？」

一目見て気に入ったらしく、穂香は本の形をした色違いのストラップを手を取った。

本は開くことが可能で、そこにプリクラを貼ったり、一言書くことが出来るようになっていた。

「いいじゃん、これにしようか？」

即決、即買い、店の隣にあるベンチに座り、今付けたばかりのそれを二人で見合った。

ふと非常口を思い出した。あの緑の光が頭を過ぎった。

そのときに気付くべきだった。これがクリスマスプレゼントだと…。

僕らは帰ろうか？と話していると、目の前を全身ずぶ濡れの男が通り過ぎて行った。

男が歩いた床は濡れて、気味の悪い光沢で輝いていた。

僕らは気にもせずエスカレーターに向かい歩いていると、男の喚く声と女の人の

「やめて下さい」と止める声が響いた。

僕らが後ろを振り返ると

「死ねよ」と

そして男は自分に火を付けた。

ポウツと柔らかい音が聞こえ、男は一瞬で火に包まれた。

男の足先から火が放たれるように一直線になって火の矢が男の歩いた道を走った。

「危ない！！」

強い力で肩を押された。僕は状況を理解出来ないまま穂香に突き飛ばされた。

何メートルか突き飛ばされ、見上げた世界は地獄だった。

男が歩いたと思われる道に炎がとり憑き、それが壁となり僕の目前に現れた。

「あああうあああ！！」

壁の向こうから、穂香の叫ぶ声が聞こえた。

僕でも何となくしか分からない、穂香の叫び声だった。

「穂香ー！！」

叫んでも返事はない。

火は周りにあるあらゆる物を燃やしていった。 文房具屋の消

しゴムも、本屋のたくさんの辞書も、百円均一のあらゆるゴミも、
全て燃やそうとしていた。

先程二人で訪れたはずの店にも火は近付いていた。

どこからか逃げ出した人が僕にガシガシぶつかって行く、非常口
の緑を指して泣きながら走って行く。

僕は炎の前で延々と名を叫ぶことしか出来なかった。

気付いたときには病院だった。

話によると火の近くで意識を失っていたらしい。

あの事件は新聞に大きく取り上げられた。

男はガソリンを被り、一階入口から侵入、そのちエスカレータ
ーを通り、二階玩具売り場で自分に火を付け死亡。

その際、男が通った道に残っていたガソリンに引火。 男性五人、
女性七人が死亡。

第2話：彼女は笑った

怪我人も多数出ており、警察は引き続き捜査をしている。
とのことだった。

僕は泣かなかった。穂香は何も残っていなかったから。
まだ穂香が生きている気がする。死んだのは分かっている、ただ
信じたくないだけ、忘れたくないだけ。

あれから三年、僕は毎年ここを訪れている。

再開したデパートだったが、あの事件以来客足は途絶え半年後には倒産していた。

そののち廃墟と化す。

僕は毎年廃墟の前に花を供える。

今年もそのつもりだったが、今回は何だか穂香が中に居る気がして仕方なかった。

昼間にも関わらず中は真っ暗で気味悪く、何度も引き返そうかと思っほど僕を臆病にした。

奥に進むにつれ、足下のゴミが酷くなり、進むのも難しくなって行った。

歩く自分の足音の他に建物がピシツと音を立てたり、割れていない窓が揺れたりし、そのことが僕をひどく弱気にした。

二階に上るためのエスカレーターは今にも動き出しそうなほど綺麗で、あの日をリアルに感じた。

「…君」

掠れ消えそうな声。

あの日の叫び声が頭に残っていたせいか、誰の声か少し考えてしまった。

「…君」

声の方を探すと入口近くに、女の子がポツンと立っていた。

あの日、学校帰りの服装のままで穂香はそこにいた。

制服の上にベージュのコートと薄いオレンジのマフラー。

つま付きながらゴミの道を抜けだし、穂香に駆け寄るとあの日と変わらぬ姿がそこにあった。

「穂香…」

さっきまでの震え上がる自分はどこえやら、穂香に会えたことで、どうしよもなく嬉しくなった。

生きていた。

そんなことは思わなかったが、あの日助けられて、助けることが出来なかった姿がそこにあった。

「久しぶりだね」

懐かしい声と柔らかい笑顔。

僕は声が出せなかった。

泣くことを堪えるので精一杯だ。

分かっている。

穂香は死んでしまっていること。もうこの世界のどこにも居ないこと。

この子は穂香だけど、あのときの穂香だけど、違うんだ。違う。

穂香は死んだんだ。

改めて受け入れた事実に涙が溢れ出る。

ドン…と強く背中が押された。僕は押された力で外に出てしまった。

あの日の倍以上の力で押され、あの日より倍近く飛ばされてしまった。

あまりにも強く押されたせいで、息がうまく出来ずその場に座りこんでしまった。

それでも廃墟に残した穂香に向かい立ち上がろうとすると

「来ないで」と声が響いた。

穂香は入口で僕を見つめていた。

「来ちゃ駄目」

地震のような軽い震動が地面を揺らした。

パララ…、ガラツなど石が崩れるような音が聞こえた数秒後。
それは突然だった。

廃墟が轟音と共に崩れだしたのだ。

あそこには穂香が居るのに、立ち上がろうとしたけれど、足が竦んでうまく立つこと出来ない。

途絶えそうな意識と崩れていく廃墟からの埃やらなんやらで視界が霞む。

そんな視界の中大きなコンクリの塊が穂香の頭上に降り注ごうと
していた。

危ない！！

と声が出なかった。

ゲホツと咳込み半泣きになることで終えた。

穂香に降り注いだコンクリは穂香を潰した。

音は振動として伝わり胸に響いた。

ズンツと重く僕に沈み、感覚を麻痺させて抜けていった。

砂埃舞う中で平然と穂香は立っていた。

「じゃあね」

口がそう動いた気がした。でも穂香はもうそこには居なかった。

その後の廃墟はものの数秒で全てを終えた。

クリスマスプレゼントはあの日と同じ

「命を助けられる」ことで、僕の些細な願い

「穂香に会いたい」を同時に叶えることとなった。

僕は砂埃の中、変わり果てた廃墟を見つめていた。

ヒューヒューと喉が鳴る。うまく呼吸が出来ない。まだ立って動くことも出来ない。

背中痛みがまだ残っていた。

穂香の痛みとして残っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5721c/>

廃墟に君は残る

2010年10月8日15時37分発行